東海林 弘靖

Shoji Hiroyasu［照明デザイナー、LIGHTDESIGN INC.代表］

生きている証でもある明かりで豊かな「新しい夜」を創り出す

照明は命のシンボル

— 照明に対してどのようにお考えですか。

建築照明に携わり、2000年にLIGHTDESIGN INC.を設立して約10年が過ぎた時、東日本大震災が発生しました。高度経済成長期に普及した蛍光灯は、明るく豊かな「新しいくらし」のシンボルでした。ところが震災後は、東京でも計画停電や間引き点灯、夜間照明の消灯などが進められ、「ムダな光」は消されていきました。当時は「照明デザインという職能すら不要なのではないか」と思うような暗い夜が広がる状況でした。そんな折、NHKのドキュメンタリー番組の取材がありました。震災前から決まっていた企画でしたが、局内で国民に勇気を与える番組だと残った企画だそうです。企画は、照明デザイナーである私がパプアニューギニアの電気のない島に渡って、人間にとって照明や光はどんな存在であるか、感じ取って来るという内容。その島では、ヤシの実から取ったわずかな植物油を灯して子どもたちが1ルクスほどの明かりで勉強をしていました。最終日にディレクターが私に「この島における照明とは何か」を村の長老に聞いて欲しいと依頼しました。そこで尋ねたところ「この島には電気は来ていない。照明もわずかしか灯らないし、明るくはない。だけど、夜になって明かりが灯らない家があると、心配になって走って行き、どうしたんだと尋ねる」とのこと。「無事に1日を過ごせた感謝の気持ちを込めて夜に灯す明かりは、そこに今日も命があるしるし」だと仰いました。東日本大震災で照明の意味を見失いそうになっていた私は、照明は明るさじゃない。命のシンボルだと教えていただいたのです。その感動は、その後の私の照明デザイン活動に大きな影響を与え、「LIGHT is LIFE」のコンセプトにもつながることになりました。

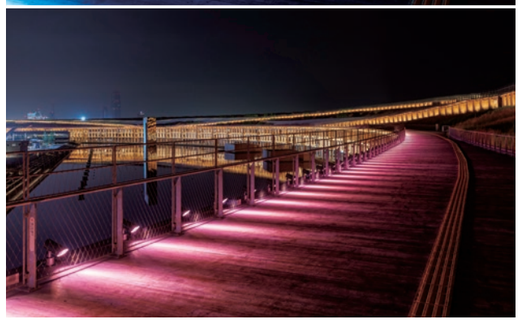
東海林 弘靖 氏

都市・建築照明デザインのコンセプトにLIGHT is LIFEを掲げる。照明は、生命の根幹にかかわる大切な環境要因であり、人間の暮らしの中で、心をいやしたり、勇気を呼び起こしたりする重要な要素と捉える。1990年より、アラスカのオーロラ、サハラ砂漠の月夜、パプアニューギニアの蛍の木など自然界の光に取材を続け、その光との出会いの感動を糧に、超高層建築からNICUまで、人間と光の本質的な関係を読み解きデザイン活動を行っている。IALD照明デザインアワードSpecial Citation、Award of Excellenceほか多数受賞。LIGHTDESIGN INC.代表。

「新しい夜」を創るための照明デザイン ガイドライン

— 照明デザインディレクターに就任されたお考えは。

2021年の秋に藤本壮介さんから照明デザインディレクターとして大阪・関西万博に参画して欲しいとオファーを受けました。大好きな建築家からの依頼でもあり、非常に名誉な仕事でこれからの時代の礎にもなることなのでぜひ受けたいとお返事しました。そしてすぐステートメントを発表しました。タイトルは「新しい夜を創る」。過剰なエネルギー消費を避け必要最小限の光で豊かな夜を実現するために、これまでとは違う新しい尺度の夜の時間の楽しみ方をテーマにしました。内容は大きく3つの概念でできています。一つ目は、夜の時間を分けること。江戸時代には「暮」「宵」「真夜」という時間帯で夜を区分していました。そこで、各時間帯の照明の在り方を工夫すれば、無駄なエネルギーを使うことなく、光を繊細に捉えることができ、美しく安定した夜が楽しめるようになるはずだと考えたのです。二つ目は会場全体を4つの照明ゾーンに区分し、静かな明るさのクワイエットゾーンを造ること。万博会場の中央にある静けさの森やウォータープラザなどはクワイエットゾーンとして動植物への配慮とともに、美しい光の景色を眺められる場所を造っています。三つ目は薄明視（はくめいし）の明かり。人は視神経の仕組みで闇に順応していく能力を持っています。それを利用すれば、ほの灯りでも不安のない良い光環境がつくれます。この3つの要素を中心として「新しい夜」と称し、具体的なアイディアも加えています。具体的には、大屋根リング屋上のスカイウォークでは足元の光を横方向に照射して歩行に必要な明るさを確保しつつ、光色や照度をゆったり変化させることで、脈々と躍動する演出としました。ここで用いたのは二十四節気。4月から10月を13シーズンに分けて色を決め、約2週間ごとに光色と動きを変えています。「ライトニングフロー」でシュミレーションした上で、最終的には藤本さんも一緒に現場で確認しました。また、会場全体の照明デザインのガイドラインを作成しました。使用する照明器具は空に光を露出しないように、直射光が隣地まで越境しないように、パビリオンは鉛直面やファサードを積極的に照らし、時間軸でのシーン変化を取り入れて欲しいなど、各ゾーンごとに照度や色温度など具体的な数字も示しています。大屋根リングの中には世界のパビリオンが入って美しい景観を創り出しています。できれば期間中に、これからの時代を映し出した「新しい夜」をご覧いただければと思っています。



大屋根リング屋上のスカイウォークの二十四節気に沿った照明演出。
大暑［空色：7月22日〜8月6日］（写真上）、秋分［茜色：9月23日〜10月7日］（写真下）

※P8のQRコードから、インタビュー動画をご覧いただけます。